

## 部活動における現状とレベルアップに向けた取り組み ——高校剣道部と大学剣道部との連携——

### The Present Situation in Extracurricular Activities and Attempt to step up the Level: Collaboration between High School and University in KENDO

高瀬 武志

桐蔭横浜大学法学部

(2017年3月18日 受理)

#### I. はじめに

現在、日本における学校教育の中には授業や特別活動の他に部活動が行われており、部活動は課外活動として設けられている<sup>1)</sup>。また、先行研究では、部活動の経験の中で、部員同士の積極的な関わりや相互的学習の交流を通じて、対人経験を重ね、社会適応能力の向上が期待できることなどが報告されている<sup>2)</sup>。以上のことから学校教育における部活動の担う役割は重要かつ教育的効果は大きいと考えられる。

また、筆者が勤務している桐蔭学園は幼稚園から大学院までを擁する総合学園であるが、学園創立以来、文武芸の三位一体教育を教育の根幹として発展してきた<sup>3)</sup>。特に高校剣道部は学園創立と同時に創部されたクラブであり、中学から大学までの体育関連の授業で剣道が採択されているなど、桐蔭学園の「剣道の有する教育的効果への理解」は深く、また期待は大きい。

桐蔭横浜大学では、スポーツ教育振興本部

の指揮のもと、強化指定クラブの指導者を中心に桐蔭学園高校の強化クラブとのクラブ間における連携教育・活動を推奨している<sup>4)</sup>。筆者は、桐蔭横浜大学剣道部（以下、大学剣道部）の監督を2015年より務めているが、桐蔭学園高校剣道部（以下、高校剣道部）のコーチ<sup>5)</sup>を2013年より兼任で務めており、剣道部の部活動における高大連携教育を念頭においた活動も徐々に軌道に乗りつつある。そこで剣道部における高大連携教育の現状を整理したうえで、実際に活動している大学生や高校生の剣道部員たちの意識調査<sup>6)</sup>をもとに高大連携教育のさらなる充実と発展を目指す指針を示すことが本論の目的である。

#### II. 高校剣道部・大学剣道部における 高大連携教育の現状と研究方法

桐蔭横浜大学では、スポーツ振興本部やスポーツサポートセンター（以下、SSC）といった組織も充実してきており、スポーツ活動やスポーツを通じた教育にも力を注いでいる。

そうした大学組織のサポートも得ながら行っている剣道部における高大連携教育の主な内容は、大学剣道部と高校剣道部が合同で活動（稽古）することにより、高校・大学の部員同士の交流や同一の指導者による一貫教育が挙げられる。特に稽古時間の関係から大学剣道部の稽古に高校生の有志部員が参加するという形式が多い。

また、最近ではSSCの活動が充実化したこともあり、SSCスタッフによる講習会や実技指導といった企画を設けて、大学剣道部と高校剣道部が合同で受講し学習する機会が増えてきている。

高校剣道部と大学剣道部の合同稽古や合同での講習会等への参加は、年に数回という頻度で開催されている。前述した通り、高校剣道部員の有志が自主的に大学剣道部の活動（稽古）に参加するということは、ほぼ毎日のように行われている<sup>7)</sup>。

また、合同での活動ではないが、高校剣道部員が桐蔭横浜大学のスポーツ関連施設を利用して活動することや大学剣道部員が桐蔭学園高校のスポーツ関連施設を利用して活動するといった機会は徐々に増加の傾向にある。以上が高校剣道部・大学剣道部における高大連携教育の現状である。

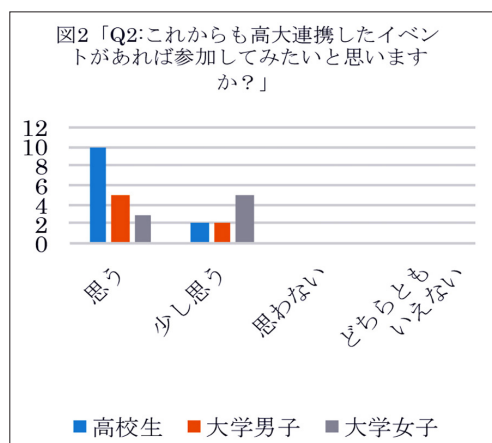
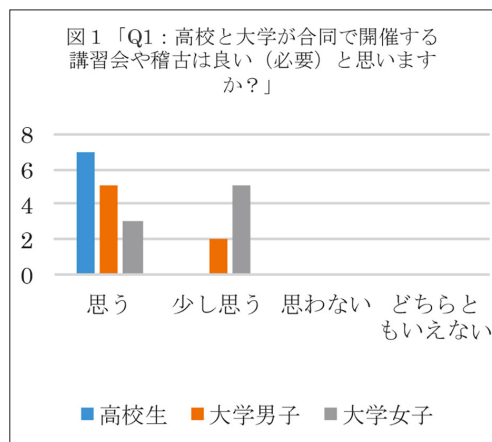
研究方法は、高大連携教育の一環である講習会等に参加した桐蔭学園高校剣道部員と桐蔭横浜大学剣道部員に対して、「高大連携教育に対する意識調査」としてアンケート調査をこない、その回答結果からの考察をおこなう。

### Ⅲ. 高校剣道部・大学剣道部における高大連携教育への意識調査の結果

平成29年2月4日に桐蔭横浜大学において開催されたスポーツサポートセンター主催の特別講習会に参加した高校男子剣道部員12名と大学剣道部員15名（男子7名、女子8名）に講習会終了後にアンケート調査<sup>8)</sup>を実施し高大連携教育への意識調査<sup>9)</sup>をおこな

った。

アンケート調査の結果をグラフにまとめると図1・2のような結果となった。



さらに細かく見てみると図3～6のようになる。

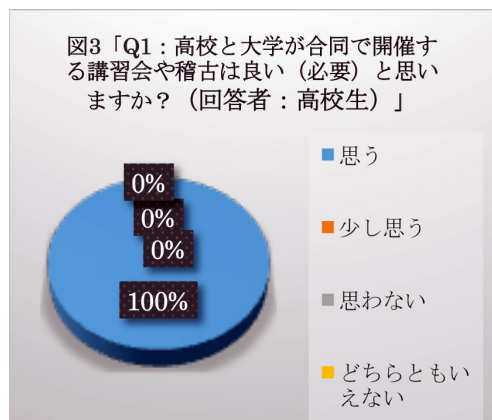


図4 「Q2：これからも高大連携したイベントがあれば参加してみたいと思いますか？（回答者：高校生）」

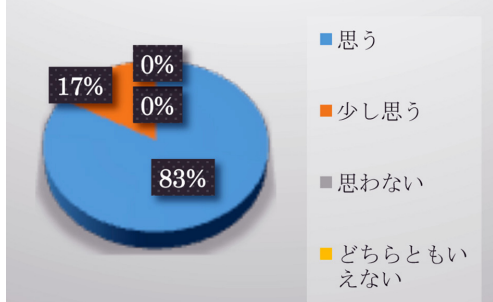


図7 「Q3：大学の施設を利用するようになって、大学への興味や関心は増しましたか？」

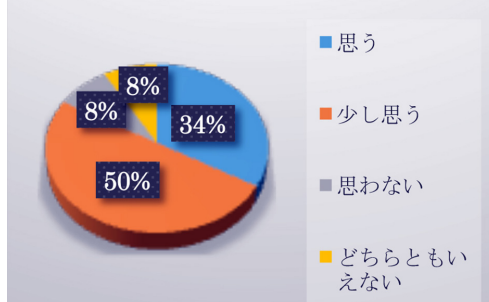


図5 「Q1：高校と大学が合同で開催する講習会や稽古は良い（必要）と思いますか？（回答者：大学生）」

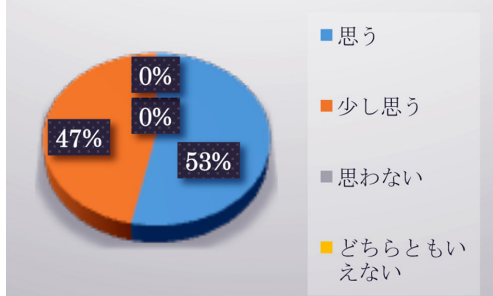


図8 「Q4：高校生と交流をもち、勉強になりましたか？」

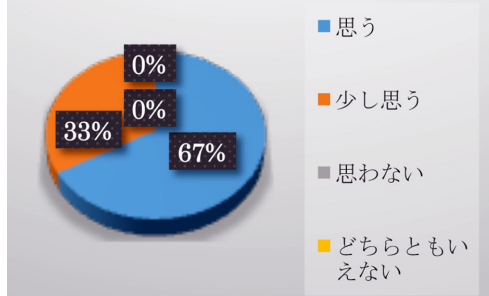
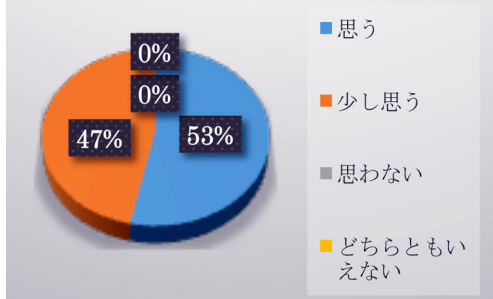


図6 「Q2：これからも高大連携したイベントがあれば参加してみたいと思いますか？（回答者：大学生）」



また、高校生のみに実施した質問項目(Q3)と大学生にのみ実施した質問項目(Q4)の結果をグラフにまとめると図7・8のようになる。

#### IV. 考察

本項では、先述した高校剣道部と大学剣道部への高大連携教育に関する意識調査の結果をもとに高校生と大学生の意識の相違を比較し考察をおこなう。

まず、高大連携でおこなう講習会や稽古といったイベントに対する意識としては、高校生・大学生ともに前向きな意識が持たれている。特に注目したいのは、高校生の回答者全員が高大連携でのイベントを必要であると考えているということである。大学生に関しては約半数の人数に留まっている。また、今後も高大連携の講習会や稽古といったイベントに参加したいかという質問に対しても、高校生の回答者は8割以上が参加したいと考えて

いることがわかる。しかし、この質問でも大学生に関しては、回答者の約半数が参加したいと答えるに留まっている。

高校生と大学生において、このような意識の違いがでることの要因を高校生の視点と大学生の視点にたつて考察する。

まず、高校生の視点にたつと、回答の多くに見られた記述として、高校では学べないような専門的な知識や経験を学ぶことができることや、自分への新たな刺激を得る機会になるというものがあった。また、高校にはない大学の施設や用具に関する回答もあった。

次に、大学生の視点にたつと、回答の多くに見られた記述として、全国でも有数の実績を誇る剣道部員<sup>10)</sup>との交流を通じて学ぶことが多いということ、同じ桐蔭という名を校名に持つ仲間としての意識が多く見られた。また、高校生との情報交換を望む回答もあった。

これらの回答の違いから考えられる意識の違いとして、高校生は高大連携教育やイベントに参加することで、自身の競技力の向上を図れるもの(知識・経験・気づき)を求めている。一方で、大学生は、自身の競技力の向上を図れるものとして(知識・経験・気づき・レベルの高い高校生との交流)を求めていることがわかる。これは、先述したように桐蔭学園高校剣道部は全国優勝5回の実績を誇る、いわゆる「名門クラブ」であるのに対し、桐蔭横浜大学剣道部は創部10年に満たない発展途上にあるクラブという意識が学生の中にあると考えられる。

実際に講習会の中でも大学生が高校生に対して遠慮していると感じられる傾向が見て取れた。このような意識が、アンケート調査のQ2に対する回答にもみられたように、「今後も高大連携教育のイベントに参加したいか?」という質問に対する大学生の回答が、やや消極的であった要因であると考えられる。しかし、Q4の回答にもあるように質問に回答した大学生全員が高校生との交流を通じて、学ぶことがあったと回答していることから、

高大連携教育という取り組みは必要であると同時に意義深いものであると考えられる。

つぎに、アンケート調査のQ3にある「講習会等を通じて大学の施設を利用するようになって、大学への興味・関心は増したか?」という質問に対しては、興味・関心が増したという高校生は3割程度に留まり、少し増したと回答した学生が5割であった。この回答結果からも、講習会やイベント等を高大連携で開催することによって、高校生の興味・関心は少しでも大学に向きつつあることが理解できる。Q3の結果から、高大連携教育の教育効果とは別の観点からも高大連携イベントは意義深いと考えられる。

## V. まとめ

本論では、高大連携教育について、筆者が勤務する桐蔭学園高校剣道部と桐蔭横浜大学剣道部の活動(部活動)に焦点をあてて、高大連携教育に対する高校生と大学生の意識の相違をアンケート調査の結果から比較考察することによって明らかにし、今後の高大連携教育の発展と充実を図るうえでの指針を示すことを目的として論をすすめてきた。

他の先行研究<sup>11)</sup>でも指摘されているように、本学における高大連携教育においても、Q1やQ2の回答結果を考察すると、大学の充実した施設や教育環境であるからこそ、高校生にとっても知的好奇心を高められるのであり、そのような学びに対して積極的な高校生と同じ環境で学ぶことによって大学生も触発されていくという相乗効果があると考えられる。よって、今後も可能な限り高大連携での講習会等のイベントを開催していくメリットはあるように考えられる。

また、高校生にとっては普段の学習環境とは異なった学習環境での学習や体験は、それだけで貴重であり、強く印象に残るように考えられる。これはアンケート調査の回答や高大連携教育を専門とする先行研究の指摘<sup>12)</sup>



からも理解できる。

さらに、高校生にとっては先述したように普段とは異なった学習環境や学習内容（レベルの高い講義や体験学習）を通じて知的好奇心への刺激や競技力の向上や専門知識の深化が期待できるのに対し、大学生にとっては高校生同様に競技力の向上や専門知識の深化のみならず、競技力の高い高校生との交流を通じて、大学生自身の競技に対する意識改革や競争心を高揚が期待できる。また、将来、教職を希望している大学生にとっては高校以下の現場の一端を知る良き学びの場となると期待できる。このように高大連携教育の場で学びあう高校生と大学生の両者が相互に学習効果を感じ得ることは、さらなる成長の一助になるだけではなく、今後の学習や活動へのモチベーション・アップ<sup>13)</sup>にも繋がる方策であると考えられる。よって、高大連携教育の一環としての講習会等といったイベントは今後も精力的に開催していく必要があると考えられる。

ただし、高大連携教育の講習会等の開催回数を増やすだけでは、マンネリ化と同時に高校生の大学に抱くイメージも刺激的なものではなくなってしまう恐れがあるため、開催する時期や内容は精査する必要がある。また、学習効果を向上させるためには、学習内容等を数値化する必要もあると考えられる。そして1回目から2回目といった回数を増やす中で、各回の繋がり（継続化）を図れると高校生は、より大学への興味を抱くのではないかと考える。桐蔭横浜大学剣道部に限って述べるならば、高校生に対する遠慮なども払拭するためにも高大連携教育の講習会等の回数を増やす中で、積極的に高校生と関わり合える学習課題を与えることと同時に大学生が高校生に指導できるテーマや学習内容を設定することも必要ではないかと考える。これらの課題は高大連携教育の発展と充実を図るうえで、今後の課題としたい。

## 【注】

- 1) 野中一成氏も『部活動での人間関係が部活動の継続と日常生活スキル向上に及ぼす影響』という研究論文の中で同様に指摘している。
- 2) 前掲の論文の中でも、同様に指摘している。
- 3) 鶴川昇：『わが人生』、文芸社、2008。
- 4) スポーツ教育振興本部は桐蔭学園内の組織であり、高校剣道部・大学剣道部共に強化クラブとして活動している。
- 5) 桐蔭学園高校は男女併学制のため男子剣道部のコーチを務めている。
- 6) 桐蔭学園での高大連携教育の一環として開催している剣道部員を対象とした講習会や稽古などに対する部員たちへのアンケートによる意識調査を行う。
- 7) 高校剣道部は16:30～18:00、大学剣道部は18:30～20:30まで活動している。
- 8) アンケート調査は「桐蔭学園高校剣道部・桐蔭横浜大学剣道部における高大連携教育に対する意識調査」というタイトルで実施した。
- 9) Q1：高校と大学が合同で開催する講習会や稽古は良い（必要）と思いますか？  
Q2：これからも高大連携したイベントがあれば参加してみたいと思いますか？  
Q3：大学の施設を利用するようになって、大学への興味や関心は増しましたか？  
Q4：高校生と交流を持ち、勉強になったことはありますか？  
\* Q3は高校生のみ、Q4は大学生のみ質問をおこなった。
- 10) 本論に関するアンケート調査をおこなった現在（2017年2月）において、大学剣道部には桐蔭学園高校からの内進生はいない。大学剣道部員全員が外進生である。
- 11) 内田尚志『実験・体験講座を中心とした高大連携教育の実戦例——想像力と創造力をどう引き出すか？——』平成23年度工学教育研究講演会講演論文集、p.180-181、公益社団法人日本工学教育協会、2011。
- 12) 米田俊彦・玉谷直子：『高大連携教育研究』、

年報 Vol.2 p.34-37, お茶の水女子大学人間発達教育研究センター, 2010.

- 13) 関秀廣 他：『新たな高大連携教育を目指した入学前交流講座』, 工学教育 50 巻, p.16-19, 日本工学教育協会, 2002.

#### 【主な参考・引用文献】

米田俊彦・玉谷直子：『高大連携教育研究』, 年報 Vol.2 p.34-37, お茶の水女子大学人間発達教育研究センター, 2010.

野中一成：『部活動での人間関係が部活動の継続と日常スキル向上に及ぼす影響』, 国際人間学フォーラム 10 巻 p.13-17. 中部大学国際人間学研究科, 2014.

浅井朋彦 他：『中高大連携による体験型物理教育Ⅳ——部活動における連携例——』, 平成 19 年度工学・工業教育研究講演会講演論文集 p.32-33, 公益社団法人日本工学教育協会, 2007.

阿部武：『スーパーサイエンスハイスクール (SSC) の高大連携教育の試み』, 化学と教育 51 巻 p.725-726, 社団法人日本化学会, 2003.

永澤明：『埼玉大学における高大連携教育』, 化学と教育 51 巻, p.731-733, 社団法人日本化学会, 2003.

関秀廣 他：『新たな高大連携教育を目指した入学前交流講座』, 工学教育 50 巻, p.16-19, 日本工学教育協会, 2002.

内田尚志：『実験・体験講座を中心とした高大連携教育の実践例——想像力と創造力をどう引き出すか?——』, 平成 23 年度工学教育研究講演会講演論文集, p.180-181, 公益社団法人日本工学教育協会, 2011.

鶴川昇：『わが人生』, 文芸社, 2008.

学校法人桐蔭学園：『創立 50 周年記念誌』, 学校法人桐蔭学園, 2014.